

ラヴィア軍秘密部隊を暗示している。イストリア連合会はこの事件を追悼する目的で2007年にトリエステに記念碑を建てた。午後にはこの追悼の儀式が行われる計画が組まれていた。

午後3時30分、トリエステ市の少し郊外にあるロズミーニ広場にて、追悼の儀式が行われる(表-2, イベント5)。広場には、午前の儀式にも参列していた団体の関係者を中心に30名ほどが集まっている。団体旗を掲げた人たちが、午前中の儀式と同じようにモニュメントの左右に整列している。その周りを参列者たちが囲んでいる。人の輪のなかにはイストリア連合会の代表と副代表が待っている。その正面には、ヴェルガローラ追悼のモニュメントが建つ。現地ポーラにある追悼の石碑より一回り以上大きな石碑である。参列者のなかには、2006年ポーラでのヴェルガローラ60周年の追悼会に参加したS. マツァローリ氏もいた³⁹⁾。この日は正装をして重い団体旗を持ちながらモニュメントの真横で屹立している。

「用意は整ったか!」という進行役の男性の号令で儀式は始まる。報道関係者がビデオカメラを構える。10名ほどの高齢の男女が歌をうたう。故国喪失体験者団体の歌だ。「わたしたちの赤褐色の土地、それはわたしたちの血……きっと帰る、わたしたちの土地に……」。司祭が追悼の祈りを述べる。その後合唱が続く。次は献花である。そのときである。司会進行役が献花の合図に述べた。

「*フォイベの殉国士 (Martiri delle Foibe)!*」⁴⁰⁾

このときに追悼されるのは、ポーラ・ヴェルガローラの犠牲者であり、「フォイベの殉国士」ではないはずである。しかし言い直されることなく式典は続けられる。花輪をもった二人とその後ろにイストリア連合会の代表がつき、献花をする。

最後にイストリア連合会の代表M. ラコタ (Massimiliano Lacota) 氏が準備した原稿をメガホンの前に広げてよく通る声でスピーチを行う。「コミュニズムの犠牲者を弔う」と述べて、「わたしたち」の一体感をつくりだす。そしてこう述べた。

「わたしたちには2000年の歴史がある。ラテン人、ヴェネト人、それゆえにイタリア人がこの土地に住んでいた」⁴¹⁾

ローマ帝国からヴェネツィア共和国を通じて、現在にいたるまでを“わたしたち”イタリア人の土地と歴史としてインヴェンションする。ヴェルガローラの追悼式だが、そこで何がなぜどのように起こったのかという歴史は一言も語られない。

ラコタ氏のスピーチが拍手で終わると、参列者たちから「よし、さすがラコタだ、ブラボー」といった声が聞こえる。これで本日の一連の儀式は終わりであり、この場を立ち去る人もいれ

ば、立ち話を続ける人もいる。団体関係者らしき男性たちが「おう、また明日、フォイベでな」と別れの挨拶をして広場を去っていった。

3.3 分析と考察——国民的想像力、国民の伝記、制度化

“ナショナル・ブロック”の“わたしたち”は、ラコタ氏のスピーチによく現れている。国民^{ネイション}としての「イタリア人」という近代的観念を、ローマ時代やヴェネツィア共和国の人々がもっていなかったことはいうまでもない⁴²⁾。しかしながら、「解釈としての歴史」では間違っているとしても、集団の「一体化としての歴史」では有効な資源となる⁴³⁾。この「それゆゑ (*dunque*)」が重要である。それによって「ラテン人」「ヴェネト人」と「イタリア人」をつなげて、ローマ的ならびにヴェネツィア的なるものを現在と直線的につなげた“わたしたちの歴史”がインヴェンションできるからである。さらにこの「それゆゑ」を何ら説明する必要もないものとして用いていることも重要である。なぜならここにB. アンダーソンのいう「国民的想像力」⁴⁴⁾が作動しているからである。

この点は、イストリア博物館落成式(表-2, イベント2)における、国民同盟(表-1, P25)の政治家R. メニア(Roberto Menia)氏のスピーチでもよく現れた。式典の最後のスピーチを任されたメニア氏は、博物館満員の参加者たちの前で、以下のように述べてこの日一番の拍手喝采を受けた。

「いまのイタリア人が知らない、ダルマチアにあるローマ帝国が残した文明、フィウーメヤポーラやパレンツォに残る文明、これらはすべてイタリアの国民的アイデンティティにとって重要なものになるだろう」⁴⁵⁾

ここにもヴェルガローラ追悼式のラコタ氏のスピーチと同じ「国民的想像力」が作動している。すなわち、イストリア半島やダルマチア沿岸に残るローマならびにヴェネツィアの遺産の数々は、「そのどれもがそれ自体としてはいかなる意味でも固有の重要性をもたず、それでいてすべてが(同時に別々のところに存在するまさにそのことによって)この“わたしたち=イタリア人”の国民的アイデンティティを表象する遺産「でいっばいの社会空間を目の前に思い浮かばせる」⁴⁶⁾ように作動するのである。

この点が逆説的に現れた瞬間こそ、「ヴェルガローラの犠牲者」というべきはずのところを「フォイベの殉国土」と言い間違えたときである。なぜなら「言い間違い」のなかに無意識の認知的フレームが露わになるからである。このときヴェルガローラで犠牲になった生身の個人、フォイベの穴で死亡したひとりひとは、そのいずれもがそれ自体として固有の重要性をもたず、取り換え可能な「殉国土」でいっばいの社会空間を想像させるためのシンボルとして運用

される。このシンボルとなったフォイベの儀式を通じて、「わたしたち」は「コミュニズムの犠牲者」であること、「野蛮なやつら」によって殺された「殉国土」は“わたしたち”ならびに「いまのイタリア人が知らない」「2000年の歴史」を、そして“わたしたち”が失った「わたしたちの土地」を想い起こさせる。

これらの追悼儀式には、「ブロック動員 (block recruitment)」⁴⁷⁾が行われる。儀式には常に一定数の人員がシャトルバスなどで動員される。儀式は、団体旗の掲揚、儀礼的なパフォーマンス、定まった式次第など定型化したかたちで行われる。その様子が新聞やテレビといったメディアを通じて報道され、社会的に認知される。この一連の儀式をトリエステに建立したいくつものモニュメントで行い、追悼儀式を習慣化していく。「おう、また明日、フォイベでな」という“自然な”挨拶がこの習慣化を暗示している。そしてこれらの儀式に正当性をあたえるのが、公的機関からの承認と制度化である。式にはトリエステの自治体と県の代表者が参列する。そして「回想の記念日」の制度化は、追悼儀式に国家からの正当性を賦与した。この制度化のチャンネルになるのが、極右政党に位置する国民同盟の政治家との緊密な連携である。

こうして制度化された追悼儀式は、シンボル化した「殉国土」を通じて、“わたしたち”の「国民の伝記」をインヴェンションするように機能するのである。

4. “国境を越えたつらなり／つながり”の“わたしたち”の構成

4.1 「わたしたちがわたしたちの歴史を書こう」という認知的フレーム

「わたしたちがわたしたちの歴史を書こう (Scriviamo noi la nostra storia)」は、チルコロ・イストリアの認知的フレームの一つである⁴⁸⁾。このフレーズには、通常のイタリア語の文章では省略されるはずの「わたしたち (noi)」が強調で入っているが、それはなぜか。「わたしたちの歴史」の内実は何か。どのように「書こう」とするのか。これらをチルコロ・イストリアがアルシア／ラシャ (クロアチア) で催した「炭鉱事故から69周年の追悼会」(表-2, イベント16) からみてみよう。

さて、チルコロ・イストリアはこの年の追悼会に先立って、『アルシア1940年2月28日—イタリアで過去最悪の炭鉱事故』⁴⁹⁾という本をアルポーナ・イタリア・コミュニティ (補遺, 表-1, 16) とともに編んだ。共著者の6名のなかには、現地アルポーナ／ラビン (クロアチア) の市民博物館 (Museo Civico di Albona) の館長も名を連ねている。本の巻末には、事故当時に書かれた文書資料の写真、犠牲者となった185名の氏名、両親の氏名、出生地・年月日、家族構成が詳しく書かれている。全体を通じて、1940年2月28日にアルシア炭鉱で何が起こったのか、なぜ起こったのか、どのような帰結が生じたかを明らかにしようとし、その根拠となる一次資料が示されている。本の出版に際する支援は、フリウーリ・ヴェネツィア・ジューリア自治州が行っている。

チルコロ・イストリアの代表L. ドリーゴ氏は、この本の目的を「1940年の悲しい出来事に応えようとして本書は編まれた」⁵⁰⁾と書いている。この「悲しい出来事」とは、1940年2月28日アルシア炭鉱にてイタリアで過去最悪の犠牲者185名を出す惨事を指す。それは、エチオピア戦争(1935-36)により国際連盟から制裁を課され、目前に迫った戦争に備えるため、国内にあった数少ない石炭資源埋蔵地への開発を急速に進めたイタリア国家の政策と、それに伴う炭鉱労働者たちへの安全基準の軽視が起因していた⁵¹⁾。この事故の犠牲者たちは「イタリア側からはクロアチア人」とされ、「クロアチア側からはイタリア人さらにはファシスト」⁵²⁾とみなされ、双方から“かれらの事故”だとみなされた。しかし実際には、「イタリア人、スロヴェニア人、クロアチア人、さらに北イタリア全土、トスカーナ、サルデーニャから移住した人々がいた」⁵³⁾。当時のトリエステ地方新聞には、事故翌日に「死者は86名まで増加。操業は全面再開へ」⁵⁴⁾と報じられ、現在までほとんど実態は知られないままだった。またイストリアの歴史にかんする包括的な著作のなかでも、最近の著作までこの事件は書かれてこなかった⁵⁵⁾。

4.2 「アルシア炭鉱事故69周年」の追悼会へ

2月28日の午後2時過ぎ、私はドリーゴ氏といっしょにトリエステのカンポ・マルツィオで待ち合わせた。トリエステから10kmほど北西にあるモンファルコーネから自家用車で来るスクロベッタ氏に、追悼会のあるアルポーナまで同乗させてもらうためだ。参加するのは、チルコロ・イストリアからドリーゴ氏、副代表スクロベッタ氏、コロンボ博士、そしてメンバーではないがトリエステの歴史家S. ボン女史、そして私の5名だった。ドリーゴ氏はボン女史と初対面の挨拶を交わす。しかしすぐに「ファーストネーム名 前」で呼び合い、車内は打ち解けた雰囲気になる。

車内はインフォーマルな会話の場である。身近な話題から、宗教、政治の話題、チルコロ・イストリアの最近出版した本のことまで及ぶ。ドリーゴ氏は追悼会で配布するために持参したその本を取り出して、これもアルシア炭鉱の本と同じように、イストリアの人たちとの協同でつくったものだと説明する。ドリーゴ氏とスクロベッタ氏はイストロ・ヴェネト方言で話し、ボン女史はトリエステ方言で話す。方言に不慣れな私をみて、ボン女史が「標準語で話そうかしら？」という、スクロベッタ氏は「方言ももう慣れてきただろうし、むしろ覚えなくちゃだめだよ」と笑って方言での会話を続ける。

トリエステを出発して二つの国境を越え、2時間ほどでアルポーナに到着する。町の入口にはヴェネツィア統治下の象徴サン・マルコ獅子が掲げられおり、その近くにはハプスブルク帝国時代の大砲が置かれている。境界域を象徴する町の景観をしきりに写真に撮る私に対して、「だけどね」と前置きをしてスクロベッタ氏は、いまこの町の住民はほとんどクロアチア語を使っておりイタリア語を話す人はごく僅かなんだよ、と“解説”する⁵⁶⁾。

広場に面したバルで一息つく。カフェを飲みながらドリーゴ氏は今後のプロジェクトにつ

いて話しを切り出す。ドリーゴ氏の出身地であるポーラの町について、自らの家族の歴史を重ねるかたちで、これまで書かれてこなかった労働者からみたポーラを描こうと考えている、と。そしてドリーゴ氏は歴史家としてボン女史にも協力を求めたいといい、ボン女史は了解する(このプロジェクトは2010年に本として出版された)⁵⁷⁾。カフェや車のなかといったインフォーマルな場面は、設立以来、常設の事務所を持たずにきたチルコロ・イストリアにとって、貴重な話し合いの場である。こうした“口約束”で、非メンバーも巻き込んで、数々のプロジェクトをかたちにしていく。

しかし、だれとも協同するわけではない。バールを出て会場に向かう途中、先日行われた「回想の記念日」に話題が及ぶ。2月10日前後の一連の「フォイベの殉国士」の追悼儀式(表-2, イベント4, 5, 7, 8)やF.フィーニが来訪した追悼式(表-2, イベント15)に言及しながら、スクロベッタ氏は、彼らはファシズムの時期にイタリア人がスロヴェニア人やクロアチア人にした事実について一切ふれず、フォイベ、フォイベ、それだけしか言わない!(foibe, foibe e basta!),そして多くのイタリア人はこの地域の歴史をほとんど知らない、だから「回想の記念日」の制度化によってフォイベだけがこの地域の歴史のすべてだと誤解される危険がある、という。ドリーゴ氏は、わたしたちはこれからも“かれら”とは反対の立場でやっていくよ、とみんなに話す。

4.3 アルシア炭鉱事故69周年の追悼会

追悼会はアルポーナ／ラビン市内の小劇場で行われた。19世紀半ばに建てられたハプスブルク帝国時代の小劇場であり、最近新しく修復された。場内ではすでに、共催団体のアルポーナ・イタリア・コミュニティ(表-1, 16)、アルポーナ／ラビン自治体(表-1, P23)、アルシア／ラシャ自治体(表-1, P24)、市民博物館(表-1, 18)の代表者たちが集まり、会の始まりを待っている。20名ほどの参加者があり、主催側も参加者も、男性はネクタイなしのシャツにセーターかジャケット、女性は落ち着いたセミフォーマルな恰好の人がほとんどである。ドリーゴ氏とスクロベッタ氏が正面席に座り、ボン女史とコロンボ博士は客席に座り、私は“記録”係として場内を静かに移動しながら写真に収める。

17時ちょうどに追悼会は始まる。アルポーナ・イタリア・コミュニティ代表D.モハロヴィッチ(Daniela Moharovic)氏は、この追悼会の司会進行と、イタリア語・クロアチア語の通訳を同時に務めながら、この会をメディアイトする。最初にアルシア／ラシャ市長は準備した原稿をときどきみながらクロアチア語で挨拶と謝意を述べる。それをモハロヴィッチ氏が逐次イタリア語に訳す。次に話したアルポーナ／ラビン市長は、チルコロ・イストリアはいつもわたしたちに“うれしいサプライズ”をもってきてくれる、このアルシアの本もその一つだ、と通訳を介さずにゆっくりとイタリア語を述べ、その後クロアチア語で感謝の辞を述べる。そ

れを受けてドリーゴ氏は、席から立ちあがって追悼の辞をこう述べる。この追悼会が「親密さ (intimità)」にみだされて行われたことをうれしく思う、アルシアの炭鉱で命を落とした方々は言葉の本当の意味での殉難者 (martiri)、すなわち労働という自らの信念 (fede) に殉じた人で、と。モハロヴィッチ氏がそれをクロアチア語に翻訳する。最前列の端で写真を撮影している私のところから、参加者のひとたちの表情がよくみえる。前方の列にひとり座っている婦人は、何かを思い出すような哀しさをうかべながらも、穏やかな表情で話に耳を傾けている。ドリーゴ氏の話が終わると、会場からは心のこもった拍手が送られる。

次にチルコロ・イストリアの副代表スクロベッタ氏が言葉をつなぐ。スクロベッタ氏が流暢なクロアチア語で「Dober dan! (こんばんは!)」と挨拶をすると、会場からは「予想外のこと」に思わず微笑みがもれる。スクロベッタ氏は持参したチルコロ・イストリアの本を紹介する。その次にマイクをわたされたボン女史は、私はクロアチア語がわからないから申し訳ないけれどもイタリア語でお話しさせていただきます、と、アルシアの事故を歴史的な文脈に位置付けて話す。

その次に10代の少女が前に出てきて詩をよみあげる。その後劇場のスクリーンを通じてアルシア炭鉱を描いたドキュメンタリーが流される。白黒映像のドキュメンタリーは炭鉱内の採掘作業から仕事を終えて地上に出てくるまでの仕事の様子を映像に収めたものである。映像ドキュメンタリーが終わった後、モハロヴィッチ氏が閉会の言葉を述べて追悼会は終わった。追悼会が終わった後も多くの人が残し、無料で配布されたチルコロ・イストリアの本に目を通したりしたり、イタリア語とクロアチア語が飛び交いながらの立ち話が続く。

劇場を後にし、モハロヴィッチ氏とともに地元のトラットリアで夕食をとる。モハロヴィッチ氏は「今年の追悼会が一番良かったと市長が言っていたけれど、わたしもそう思うわ。一昨年、昨年はもっと上の公人や要人が来たのだけれどあまりよくなかった。今年はそれほどいなかったけれど、とにかくとてもよかったわ」と伝える。それを受けてドリーゴ氏は「今年は去年より《親密さ (intimità)》があったね、それがお互いに伝わったかもしれないね」と答える。その後テーブルの話題はいろいろな事柄に及び、食事を済ませてアルポーナを出発したのは21時ごろになっていた。

トリエステへ引き返す車中で、ドリーゴ氏はぼつりぼつりと個人的な体験を語る。故国喪失として家族とポーラを離れたとき自分は17歳だった、普通でもこの年頃は多感な時期なのに自分の故郷を離れるという劇的な体験をした、ローマに辿り着いたときも、そしていまでも、この体験から湧き上がる感情を乗り越えることはとても難しい、でも私は自分なりのやり方で乗り越えようとしてきたのだ、と。ボン女史が言葉をつなぐ。私の内にも克服しがたいものがある、“かれら”への憎しみのようなものがないかといえば嘘になる、私は歴史家だけれどももっと新しい歴史を書く試みがあっていい、人間の体験や感情のようなものと歴史的なものを

つなげることが必要なのではないかと考えている、なぜならこの地域の歴史とわたしたちの心理的な苦しみは、実は連動しているのだから、と。

翌年の2010年2月27日も、チルコロ・イストリアはアルポーナで催された70周年の記念追悼会に公式に参加した。その数日後にはトリエステにて「アルシア炭鉱の悲劇70周年」と題する会合を州立歴史研究所（表-1, 13）と協同で開催した。アルポーナからは市立博物館館長もかけつけた。そして『アルシア1940年2月28日—イタリアで過去最悪の炭鉱事故』のクロアチア語翻訳が出来上がったと発表された⁵⁸⁾。

4.4 分析と考察——協同・協働、文化、親密さ、コムニタス

「わたしたちがわたしたちの歴史を書こう」の“わたしたち”は、本作りや追悼会の実施プロセスに現れている。歴史家やイストリア現地の機関との協同、アルポーナのイタリア・コミュニティとの追悼会、またロヴィーニョ／ロヴィーニでの本紹介（表-2, イベント18）でも当地のイタリア・コミュニティと協同している。この社会関係は「われわれ=イタリア国民^{ネイション}」の境界線で止まるものではなく、現在のイストリアのクロアチア系住民や地方自治体との相互関係も含んでいる。追悼会でのイタリア語およびクロアチア語を交えたコミュニケーションがそれを示している。国境を越えた人や組織や地方自治体とのゆるやかなネットワークを伏流させ、「協定」や「協約」での制度化を急がず、「口約束」からプロジェクトが実現するのを待つ。追悼会のときにクロアチア語で挨拶をしたスクロペッタ氏はこう説明する。

「あのとき会場の雰囲気は少し和らいだでしょう？ 実は数年前にトリエステとイストリアで文化フォーラムがあったときも、クロアチア語とスロヴェニア語で挨拶をしたんだ。トリエステの地方紙は何もふれなかったけれど、スロヴェニアとクロアチアの新聞にはそのことがちゃんと書いてあるんだよ！ スロヴェニアとクロアチアの記者には伝わっているんだけど、それは私なりの《相手に対する敬意（rispetto per gli altri）》の表し方なのだよ」⁵⁹⁾

なぜこのような試みを繰り返すのか。続けてこう述べる。

「ファシズムのときには文化に優越がつけられた、イタリアの文化は優れていてスラヴの文化は劣っていると。文化に《セリエA》と《セリエB》をつくったのだよ、そんなことはばかっているよ、文化に優れているも劣っているもないのだから」⁶⁰⁾

ここに行為のフィールドが「文化」に向けられていることがわかる。ここでの「文化」は、